

離れていてもつながる

ろう学校 5道県リモートで交流



愛知のみそカツをおいしそうに頬張り、笑顔がこぼれた（松江市で）



交流会では各学校とリモートでつながり、借り物競争やじゃんけん大会で盛り上がった（同）

将来どんな人になりたい？――記者の質問に6年生の石橋優乃さんは「聞こえなくてもできる仕事をつくりたい」、5年生の青山心優さんは「お母さんと同じ病院関係で働きたい」と力強く返答した。（随時掲載）

同校教諭の勝部淳さんは「聴覚に障害があると会話で得られる情報が少ないため、どうしても相手の気持ちに気がつきにくくなる」と語り、「給食や交流会を通じて思いをきちんと伝え合う『気持ちの見える化』につながる」とプロジェクトの成果を見詰める。

「みそカツが最高」「芋餅っておいしい」。17日、松江市の島根県立松江ろう学校の給食室に、手話と歓声が交錯した。幼稚部、小学部、中学部、高等部に在籍する計29人のうち、小学部以上の25人が一緒に食べる。この日の献立は、島根産の麦ご飯と牛乳に、愛知のみそカツ、茨城のリンコン納豆あえ、熊本のタイピーエン、北海道の芋餅。おかずとデザートは交流校から送られてきたレシピなどを基に、校舎内にある給食調理室で

作られた。6年生の安部隼人君がお代わりじゃんけんに勝って芋餅を皿に盛り付け、「うれしい」を笑顔と手話で表した。このプロジェクトは、コロナ禍が世界に暗い影を落とし始めた2020年2月、「みんな元気になるろう」と愛知県立岡崎聾（ろう）学校の提案が始まった。

賛同したのは、松江ろう学校、北海道立旭川聾学校、熊本県立熊本聾学校、日本で初めて聴覚障害や視覚障害を入学条件にした筑波技術大学。リモートによるクイズ大会、じゃんけん大会、気象学習会などを定期的に行う他、各地の郷土料理を給食に出している。松江ろう学校が紹介した島根料理で人気が高いのは「うずめ飯」だ。

給食
百景